

僧形抄——a trailer

音をブルーにする…

雲行きの／略訛に衡を 競<sup>ま</sup>って、弾む拄杖！

揺らぎ立つ 歩は緑に、だが忽ち瀝<sup>アスファルト</sup>青を擦過し

(またビッグ・ジョー ギター取り……)

軋<sup>わ</sup>って 跋涉は黒々と鍛冶へ、浮かぶのだ／裂けて

散らばるモナド掻き鳴らせば鉄床を／透かし

街路に煙る、水銀で葺かれた／太陽の寺、言<sup>こと</sup>の寺

この運行も脚下の白い／空に風致を興<sup>おこ</sup>すまで

何度でも戦<sup>ま</sup>がされねばならない

夏  
際  
敏  
生



路上、顔も薄まり光冠のように……

風を／挽いて過ぎる形振りに  
なお滲む朝焼け……

狂乱に霞む手にも雲は香る！

だが、垂れて来る馬を 木立を

抱き取る佇みは／舞い落ちる大気の  
破片に影をつけられ、急速に 逝ってしまう

氷った家々に横切られて／空へ  
射して行く、おれたちの肉の暈の

霽れるのは 今日か？／今日で霽れるか

心臓……

この空を沸てて 血と成す巧みに

ひと荒れの 気色は揺れて……

起首よ、愛を焼け 息を焦がせ

錠る手と手の 拳世を燻せ！

つらる、舞姫 舞姫／西川千子 舞／飯田彰

直江屋主人曰く

美術協力 直江屋主人  
写真(口絵・左紙・扉・裏表紙) 田嶋洋一郎  
写真(p.12,p.40) 柳谷俊美  
絵(p.18,p.31,p.32) 水津俊



燃える樹葉から 掠めた炭で  
緘黙の／ぞっとする楽器を仕込むんだ  
露よりも劇しく散った／腕の上に

命がここへ／極まって来る 猛々しい  
杳の／その骨髓は 鳴らされる  
鳴らされ、また鳴らされる……

(風も靡き 銅も流れ)

落ちながら花は 暗い化合へと蒔かれる  
煌めく難所！ その  
震える 縁で／性も地平も翻えり

遠く 芽ぐんでいる／夏至に  
乱され、しだかれて  
脊椎から暮れていくのだ

届けられた日に……

朝、おれたちは一通の花の中で／天体の

性へと曲がる、その淫乱へと／折れる

そして抜き出された 賑やかな／脚は  
光線のように鎮まり

毎日の灰を ダンスへと濡らし

額に茹だる 電鈴は／夕日を

重力を、深い谷を／掻き立て

(涙は激して灘となり……)、氷の

垣塙に／美しい 屠殺工場を遁れさせる！

この創傷面並び立てて……

拭われた空壕に幾つもの／長い

磊々しい微笑が／鑄込まれたところ

躍り上がる浴道から昼は／現物の

生傷として、開けて来る 寸法だろう

最も精妙な崖のギャロップする／工事

空宙の／首領は 回る天穴

音楽は魂の形だ  
その歩行は揺らぎ立つ  
人類という血の洗礼  
晴日すべき天才の青の熱さ！

季節の／首尾は 回る天だが  
零れて行く露の／手に寸鉄は轟き

断面、断面、断面、断面……

途切れて、朝……

電気であつたか、采であつたか

この消息／なお尖り続け

乱れ通し 散り敷いての／星系、その岸で

ぎらつく 夏草の間に、透き返り

遠人からも遠く……

蝶に 掠められる／視覚……

地衣にまで 明けて行く脳／そして

野天 ぼたえ死へと 溶け入る膂力

蒸気であつたか、数であつたか……

さて残片、窮髪に緑の／血一本！

笑う 指の／エピアニーが来るのか？

その事ではない……

照りつける無聊を賺かし／黒ずむ

鳥声を塗り立てて

忘形へ、吹き零れて行くのは誰か

沖も高層雲も梳られる／力線を

総毛立って 転がっているのは誰なのか

余事から余事へ

石の腐蝕を遂げさせる出来事の／走行

あどけない遅滞に、鏝際は締めきつるのか

終りは揺曳し……

……

音楽は魂の形だ  
その歩行は揺らぎ立つ  
人類という血の洗礼  
睨目すべき天才の書の熱さ！

形骸、放散の音楽  
Rimbaud, Genie

元 10000円  
5000円  
1000円

倍録数字  
増録数字  
形



発行 書肆山田  
東京都豊島区南池袋2-8-5-301  
☎03・988・7467

田山報書行  
 100-2-8-5 東京都中央区新富町2-8-5  
 TEL: 03-5561-1987

題目すへも天木の香の燃ち！  
 人懐さびしき血の潤し  
 そのまじりお静ら立ち  
 音楽お舞の運び

空、裸き、感情！

おれたちの循環系で羽撃く／僧形  
 それは、二十世紀に停車した空に／発覚している  
 最も煌らかな溢血である！

どれほどに澄んで 笑おうと／流れて  
 いる腰の／嵩は、悪臭に

踊り寄られる仕器の／汗に集られているのだ

耳が 滑って行く葉脈の／星系、その岸で  
 起床する／水煙へ

先ずは河を、立たせるべきだろう

(そしてこのベルが優しく／泣いている間に……)

星を／焚きつける眼差しが

積み込まれるために

駅舎に開く肉体は／ごっそり瞑目する必要がある

笑って情代／愛憎に輪白イ職米香のな！

地面は堅く何を結び：

どよめき、とはどこの 花束の

働きであったか／何もない調べに展げられる

どんな終点が麗しいのか

すべての絹布を括って／余る虐殺が  
逃げて行つた！

通り合わせた一つの／水溜り、そこに  
幾つの決定が／羞らっているか

曖昧な疾走よ、陸の残した空の数を上げよ

手が、張り裂ける：

竄れるべき深緑は水に／覚まされ

この腕骨に忍んで、行き悩む

袖を逸れて月も／どこへ碎けた？

（口吻ひとり／捨身をもって草上に 音を繋ぐのか……）



体からだ尽く、空へと 狭せままれば

落花の栄え、玻璃の山の／ささくれ、籬かきの吹雪ふきゆき

滴したたれよ 指も幻も、黒死病よりなおしどけなく！  
あの 老木の裏に取り付いてスベクターを産ませろ

人廃れて 水銀の／波頭……

進めば他年は 何と久しい寸余！

血の毀損、そして腹部と斜面は……

白しろ地に頽くずれれて来る／丘々を  
匿かくまい、新しい恋を植える

水影として募りゆく訛音の／陵に

乱婚は 厳しく跳ねて

交まじされる血液は虹に、開かれ  
燥せぐ鉱物へと、起草され

産褥は海のように黒く晴れる！

(生唾に／揺らめく他日……)

王子と、そして王女が薫るのも遂に  
遠く街上へ／絞られるのだから

どんな手跡も幾度となく／砂漠に  
絶え続けることを／樂とするべきなのだ

動物……

千年の／火災を渡って雪は、女たちよ  
あなたの血漿に紛れ、そして熱い／砂丘の

ダンスの格で、空を 溶かしたいのだ／緑色の

艶やかな 気象を

全動物誌の上に／棚引かせようというのだ

そして肉体の／鈴は振られ

もう一度振られて、女たちよ／あなたの  
性愛は風に／濾され、水に練られ、光る高原の  
幾千が／あなたの逞しい霊性となる！

雪の／女たちよ、あなたの婚儀は飛ぶのだ  
恒星の諸島の真上を／地球の色彩を着けたままで！  
淫らな／六方晶系の影像となつて……

言えないものが言えなく……

死尽くめの 物种しゆくさを鋤いて／水面へ

所述の／形を移す (きらきらと

反射は ひとり 悲しめよ……)

眼ばかり ばたつかせて、大陸の  
数々は溺れて行く！

蒼々と 繁る空気の／波間に

樹を矯める唇に 嚼する／星の

深さは、オーロラのような音楽のような

寒い腐臭で 昂たかっている

水に焼かれる鬨字の／息根で、顫える  
翅らしい 物の／欠片…… (神よ！)

一夜の暖を お取りになつて下さい

海が重体……

潮が引きはじめた昏に 筋立つ／危礁……  
横たわる 土を 尋ねている時、体は最も重くなる

諸行の有為を 脱げる／岬は見えたか？  
夢幻は積をもつてなお、着知らぬ肌を織ることがない

死力も他事ばかりを挙って、氷山へ落下して行く  
淋しい海に 緑髪を薫き染める声の／振りはついたか？

痴愚へ 昇るまでに息巻く／齒列が  
水上に、落日よりも悲しい辞色を 刻むだけだ

そしてすべての口舌の／裂傷を、蹙って来る  
最尾の 海亀／この 丈高い、鉦物の／海難……

波よ、悪血が敷き及んだ その際目を抜けて  
空に管絃の／位置を 埋けに立つがいい！

DAISETI NAGABARE

小園四景

写真 神谷俊美

